

2. 未来に伝える歴史と文化

「篠路村烈々布素人芝居」から「篠路子ども歌舞伎」へ

篠路歌舞伎保存会 会長 おお たか ひで お 大高 英男



篠路村烈々布素人芝居の創始者の大沼三四郎（一番左）

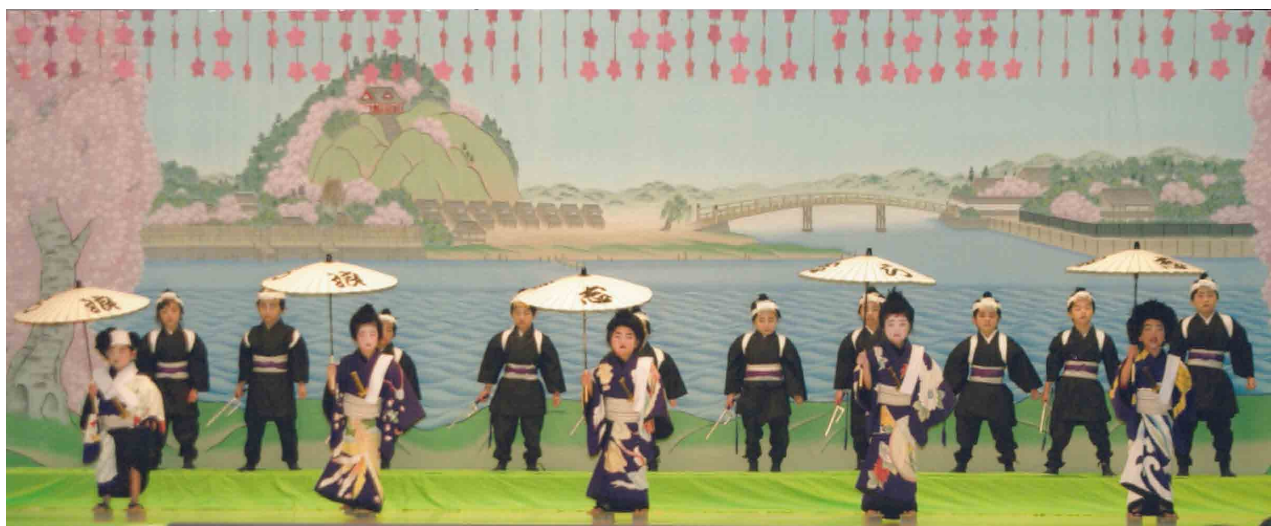
明治時代、本州や九州から、篠路村に入植した開拓移民を悩ませていたのは、頻繁におこる石狩川の氾濫でした。大洪水は開拓移民の生活に深刻な影響を与えていました。農作物への被害は甚大で、これによって多くの篠路村村民が農地を放棄して、離村するということがありました。特に、明治29年と明治31年の大洪水は大きな被害を残しました。

この災害を乗り越えるために、村の青年たちは神社（天満宮）を創建しました。そして、青年たちは健全娯楽としての素人芝居を神社に奉納しようと、歌舞伎の稽古に取り組みました。これが「篠路村烈々布素人芝居」で、明治35年4月に初公演しました。

後に、「篠路歌舞伎」と呼ぶようになったのは、昭和47年頃に調査に来ていた文化関係者が「烈々布という集落はもうないのだから」とし、それ以来「篠路歌舞伎」と呼ばれるようになりました。

篠路歌舞伎は、篠路村を中心に33年間、演じられていましたが、昭和9年11月の公演を最後に、それ以来50年間演じられることはありませんでした。

この篠路歌舞伎が復活したきっかけとなったのが、昭和60年の篠路コミュニティセンターの建設でした。この開館祝賀会において、地元有志によって演じられた“ほてから座公演・白浪五人男”しらなみごにんおとこは、祝賀会参加者の拍手喝采を浴びて、半世紀もの間、演じられることのなかった篠路歌舞伎の復



演目「白浪五人男」

活を喜んだのでした。

復活した篠路歌舞伎を、これからも保存伝承していこうと、昭和61年12月に「篠路歌舞伎保存会」が創立されました。

当初、地域の有志の者は、大人による歌舞伎の復活を考えていましたが、これには諸々の問題があり実現は難しいということになりました。しかし、篠路歌舞伎の復活と伝承を何としてでも実現することに情熱を抱いていた初代会長の柳沢正幸氏は、これを篠路中央保育園の園児に教えて、「子ども歌舞伎」を実現させました。これが大好評で、以来、篠路コミュニティセンターを会場に開催される篠路文化祭などで公演を行い、毎年大好評を得ています。演目も年によって変え、現在「白浪しらなみ五人男ごにんおとこ」、「忠臣蔵ちゆうしんざう」、「勧進帳かんじんちやう」の三演目を有しています。

明治、大正、昭和の三年代に演じられていた「篠路歌舞伎」を伝承した「篠路子ども歌舞伎」は郷土の伝統芸能として、永く公演できるようこれからも市民の理解と支援を得てまいりたい。そして、観る方に感動と感激を与えたいと思っています。



昭和9年11月の公演風景



演目「忠臣蔵」



演目「勧進帳」

保存会は、現在、80名の個人会員と7団体の会員で運営しています。会員の加入は随時受け付けていますので、下記までご連絡ください。

○お問い合わせ

- ・会長（大高）TEL. 011-771-1166
- ・総務（大沼）TEL. 090-7301-3830
- ・年会費：千円です。